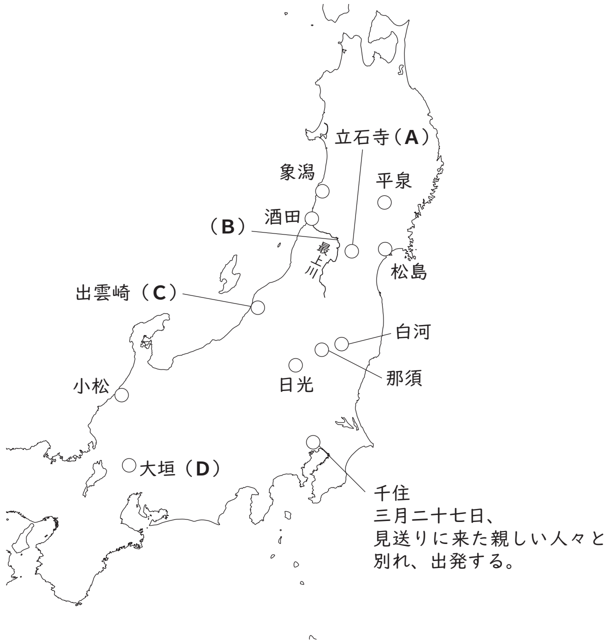
夏草――「おくのほそ道」から(1)

松尾芭蕉

『おくのほそ道』の基礎知識

『おくのほそ道』は**江戸時代**前期の**松尾芭蕉**による紀行文。芭蕉（本名・宗房）は伊賀国出身の俳人で、俳諧の芸術性を高め、蕉風俳諧を創始した。

『おくのほそ道』には、芭蕉が四十六歳の元禄二（一六八九）年、門人・河合曾良とともに江戸を出発し、奥羽・北陸を経て美濃国大垣に至った旅について記されている。



A
閑かさや岩にしみ入る蟬の声
なんという静けさだろう。ただ岩にしみ入るように蟬の声だけが聞こえている。

B
五月雨をあつめて早し最上川
折からの梅雨の雨を集めて水がみなぎり、いちだんと流れが速い。この最上川よ。

C
荒海や佐渡によこたふ天河
日本海の荒海よ。海のかなたにある佐渡島にかけて天の川が横たわっている。

D
蛤のふたみに別れ行く秋ぞ
蛤が蓋と身にわかれるように、集ってくれた親しい人々と別れ、私は伊勢の二見が浦に行く、過ぎ行く秋よ。

俳諧

複数の人が長句（五七五）と短句（七七）を交互に詠み継いでいく文芸を**連歌**という。連歌は室町時代に流行し、連歌の中でも滑稽さを求めたものは、俳諧の連歌、略して**俳諧**とよばれた。また、連歌の最初の一句を**発句**という。発句には最初の句としてその時々の季節を表す語が求められた。

江戸時代になると、松尾芭蕉のほか、与謝蕪村、小林一茶といった俳人が現れ、発句は独立して鑑賞されるようになった。その後、明治時代の正岡子規らによって、近代俳句が確立した。

確認テスト

(1) 次の文の（　　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『おくのほそ道』は（①）の前期に（②）によって書かれた紀行文である。

ア 室町時代　**イ** 安土桃山時代　**ウ** 江戸時代
エ 小林一茶　**オ** 松尾芭蕉　**カ** 与謝蕪村

①［　　］　②［　　］

(2) **A**〜**D**の句の季語が表している季節をそれぞれ答えなさい。

A［　　］　**B**［　　］　**C**［　　］　**D**［　　］

(3) **A**と**C**の句は、含まれる切れ字と、句切れが共通している。共通して含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を記号で答えなさい。

切れ字［　　］　句切れ［　　］

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

(4) 次の①・②の句に含まれる季語をそれぞれ書きぬき、季語が表す季節を答えなさい。

① 野を横に馬牽むけよほととぎす（那須）
② むざむやな甲の下のきりぎりす（小松）

① 季語［　　］　季節［　　］
② 季語［　　］　季節［　　］